

鯛を太らせる蝦、あるいは蠅螂の鎌の駄弁 ——若桑みどり様へ

稲賀繁美

(美術と美術誌のあいだを考える会一般会員／イメージ&ジェンダー研究会泡盛会員)

若桑みどり様、

拙文に対して、きちんとした対応を取って戴けたことに、まず心から感謝申し上げます。何を言っても言い放しのこの国の言語環境の異様さに半ば諦めていた者としては、久々に（でもあるまいにという罵倒が飛んできそうですが）意味のある——と望んでおりますが——波風を立てる切っ掛けを得られただけでも多とせねばならないでしょう。「この国の言語環境」と申しましたときに脳裏にあったのは、ゴーマニズムという新宗教に関する社会学的といったよい若桑様の鋭利な分析で、その周到なる批判には喝采を送りつつ、その一方で、いま新たに製造されつつある、ゴーマニズムに敷いを求める人々の姿に、日本の教育がいつのまにか広げてしまった空洞の大きさも推し量れて、戦慄を催さないわけには参りませんでした（若桑みどり「『ゴーマニズム宣言』を若者がどう読むか」『季刊 戦争責任研究』第18号、日本の戦争責任資料センター、1998、pp. 34-41）。

この国における——などと一般化することは差し控えねばなりません——論争は得てして不毛な罵りあいになってしまいかちです。しかし、それは当方が千野香織氏の一文に対する批判を書いたことの目的ではありません。今回の意見交換も、建設的な応酬が不可能になった時点で、口を噤むべきと考えていますことを、まず冒頭に断ります。また本来、第三者の立場からの評定に任せて、小生としては弁解がましい行いは、あるいは慎むのが、この国の仕来りかもしれません。さらに、本来ならば、同一の「学会」に所属している上下関係のうえからも、「千野先生」、「若桑先生」とお呼びすべき筋合いかもしれませんが、敢えてこうしたこの国の慣例には従いません。後世の歴史家が参照して無意味では

ないだけの意義と水準とを当方の能力の限りで目指したく存じますが、もとより当方の作文は「明晰」でも「説得的」でもない様子ですので、読解能力の不十分な点をお突きになってお手上げに追い込めるとご判断の折には、ご容赦下さなくて結構です。

まず前提として一言。本誌の一読者（たまたま女性だとのことですが）が、小生の千野批判に〈異様に冷酷にみえる〉との評を下されたことに、小生としては深く感謝いたしました。（異様）が否かは判断の分かれるところでしょうが、冷酷⇔冷酷なる分析ができないようならば、論争などしないほうが精神衛生上よろしいでしょう。また千野氏が少くとも「冷酷」な批判に値する学者と信じての選択が、1.5ページという、釣り合いを欠いた〈異様〉に長い紙面を、千野氏の一文への批判に割く決断の裏にあったことも確かです。現在千野氏が、それに値するだけの社会的影響力を発揮する立場にあり、主体的にその責務を国内外で果敢に果たし（その立論の危うさに度々接し）、またこの一文に、きちんと議論をしておくだけの「歴史的」といってよい価値を認めればこそその批判であったことを、まず最初にお断りしておきます。

それではご指摘の——当方としてはまったく話が噛みあわず理解に苦しむ——諸点に関する確認に移らせていただきます。

〔1〕第1に若桑様が問題とされるのは、〈ジェンダーの視点から主要な誤謬を打破すると信ずるなら、かかる信仰こそ「一部」の「価値観」を「普遍的」なものを取り違える誤謬を犯すことになる〉という拙文です。ここにジェンダー研究の有効性そのものへの敬意を読みとるような読者がありうることを、筆者と

しては「深読み」だとか「誤読」だとかと言って糾弾できる立場にはありません（誤読も権利のうちでしょう）。ただ、ここで問題にしたかったのは、それがジェンダーに係わることであろうが、それ以外の問題であろうか（こうした物言いがすでにジェンダー論に対する侮辱だと指弾されるのなら仕方ありませんが）、千野氏の立論には、突き詰めると純粋に論理的に——すなわち冷徹に——言って「甘い」ところが露呈しかねないので、くれぐれもご注意を、と（いらぬ老妻心ながら）申し上げたにすぎません。

一言やむなく抗弁申し上げますが、稍賀は〈日本美術史学の現状に息苦しさを覚える〉が、〈ジェンダー論の欠如がその理由だとは考えられないと断言〉（本誌29号p.6）するような幼稚な発言はしておりません。〈日本美術史学の状況に息苦しさを覚える〉原因に〈ジェンダー論の欠如〉が存在することは認めるが、ただ〈息苦しき〉のすべての原因を〈ジェンダー論の欠如〉に還元することは、危険であり、論理操作としても、攻撃目標である——自分が「主要」だと信じてきた——敵方の誤謬を繰り返すことになりますよ、というのが、ここに読み取って載きたいすべてです。そのことを述べた部分が若桑様にとって「どうしても理解できなかった箇所」となってしまったのは、いわば当然で、当方の試みたのは、集合論上の「論理」の厳密さを千野氏に要請することでこそあれ、千野氏の〈息苦しき〉が「論理的」に間違っている（同上p.5）などという、若桑様も困惑されるような非論理的なことを言うはずありません。もとより当方は千野氏の感じた〈息苦しき〉を（理解できない）などとは、一度も書いておりませんが、そもそも他人の痛みを（理解）できる、といった安易な発言の危うさこそが、今日ジェンダー論の重要な論点のひとつとなってきたのではなかったでしょうか（やや徒勞感を覚ゆ）。

当方の「言い換え」では、〈ジェンダーの観点から重要な誤謬を……〉と〈主要〉という言葉は補いました。これは〈一部の異性愛男性の価値観〉のかたよりに代わるものを、かりに〈主要な〉価値観として、〈オルタナテ

ィヴ〉として立てるのであれば、それは自動的に、純粋に没価値的な論理の必然として〈「一部」の「価値観」を「普遍的」なものと取り違える〉、という、〈男性原理〉側が犯してきた〈誤謬〉を繰り返す危険があるだろう、というまでです。（但し急いで付け加えれば、千野氏自身は（？）、周到にも、〈主要な〉などという言葉遣いは避けておられますから、注意深い読者は、拙論のこの部分が、千野氏の文章に直接向けられているのではなく、いわば千野氏批判以前の一般的前提に過ぎないことは、容易にお分かりになるはずです）。

今回若桑様の発言に添付された千野氏の文章には、ジェンダー論で（すべてが変わる）という宣言が見えますが、これは前回の拙文では取立て揚げ足を取らずに控えた部分です。主観的にはまったく疑いを容れない発言ながら、こうした安易な誇張こそは、〈その脱構築には「なお」想像を絶した抵抗」を組織させるに達しない〈男性支配〉という敵方に塩を送るも同然でしょう。〈一部の男性異性愛の価値観〉を〈一部〉へとしかるべく縮小させるために必要な地道な努力を、かえって水泡に絡せしめる危険は回避するだけの精微さが必要ではないでしょうか。以上、ジェンダー論そのものとはまったく無関係な、あくまで純粋に論理的操作上の危うさを指摘する（冷徹）な立場ですが、「女性」からの指摘ならとにかく、「男性」からなら、いらぬお節介——と映るようでしたら、そうした本質論的批判にはもとより拘泥する気はございません。

なお一見項末ですが、若桑様の引用には〈重要な誤謬〉とありますが、小生は〈重要〉という言葉は言葉ではなく、純粋に論理的な範疇として〈一部〉の対として〈主要な〉という言葉は補ったことを付記します。（ジェンダーの視点が重要な誤謬を打破する）という一般論だったならば、小生とて何ら異論もなかったはずです。その限りで三田晴夫氏の——若桑様の読解による——見解とは、小生の意見は対立するかと存じます。自分では思いつけぬ範疇に他人様といっしょに括されるのは、言語活動には不可避の不幸ですが、少なくとも上記（…）に関する限りは、小生が若桑様と共通の〈理解に至ることも決して困

難ではないように) 小生も思います。

[2-1] 第2点として若桑様を取り上げるのは「美術史学」がかかる「異性愛男性」の「価値観」に無批判に迎合してきたとすれば、それは男性支配が、(善悪はとにかく)「主流」な公的秩序を司ってきた証拠にすぎず、それを「間違い」と断ずる〔談ずる〕ではなく〕のは、歴史認識としては、かえって「間違い」ともなろう(同上p.6)という拙文です。これには前半と後半があり、まず前半では千野氏が「異性愛男性の価値観によって選ばれた」と表現したのを稲賀が「異性愛男性の価値観に無批判に迎合してきた」と言い直したのがけしからん、とのご批判です。しかしながら、いやしくもジェンダー論論者が「異性愛男性」の「価値観」に無批判に迎合)するなどという事態は、そもそも論理的に矛盾した話で、そんな法外な断言をした覚えはもとよりありません。(迎合)しうる主体は、この語彙を選択した段階で千野氏の原文とは明確に“ずれ”ているはずですし、その“ずれ”をはっきりさせるために(迎合)という価値観を含んだ語彙が選択されたはず(男性を中心とする)研究者たちがつい最近まで無意識的にもせよ(迎合してきた)というふうに、事態を「解釈」した責任は甘んじて引き受けますが、こうして美術史の〈男性支配〉への批判的言辞を——あくまで当方の責任で——弄したことで、お褒めでも頂戴するならともかく、かえって若桑様からご批判を戴くのは誠に心外で、なにやら倒錯した事態です。でもそのことで文句を申しているわけではありません。

と申しますのも、ここから我々(両者の基本的な認識の差異)が、内容こそ若桑様のご指摘とは異なるもの、はっきりしてくるからです。その前提として、まず誤解をひとつ解いておかねばなりません。当方には「非人稱の、非階層的な、非性的な、非人種的な、いわば超人間的な、いかなる美術史学も存在しない」ということが分かっていない、とお叱りですが、当方がその後の、若桑様が言及しておられない箇所では、まさにそうした複数の力の競合としてしか存在し得

ないはずの美術史(学)が、やがて何故かポリフォニーを失い、(矛盾をはらみ相互に衝突する研究者個々人の声の総体は、いつしか闘争状態から脱して、誰の声でもないが誰の声でもあるような、普遍性の衣をまとった)それこそ若桑様が批判してやまない(大文字)の、非人稱的な「美術史」、およびそれを司る特權的な「美術史学」なる(權威の言説へと変質を遂げて流通するにいたる)、という信仰の魔術でした(本誌)。そうした事態の歴史的分析を通じて、(大文字の美術史)なる怪物が徘徊する倒錯への抵抗を、微力ながら試みてきたつもり(夢原=稲賀「絵画の賞音——エドゥアール・マネ没後の闘争」、名古屋大学出版会、1997)の小生としても、(ひどい疲労を覚えた)のは、このように共通の敵を認識しているはずなのに、たまたま生物学的な性の分配が違うというだけの——生物学決定論的な——理由で、かくも(理解)が滞ってしまう、という事態です。

そのうえで、この応酬が無駄ではなかったのは、「美術史学」なる言葉に託すものが、両者で違っていることが露呈したからです。美術史学会の内部から、「ジェンダー史観」を武器にその刷新に挺身しておられる立場の方々の責任感と、いわばそれを突き放して美術史学史という権力抗争の場そのものを批判の対象と見る、学会の末端ないし異端の立場とのずれは、ここで妥協不可能となった様子です。蛇足ながら、「美術史家」を(〈ある時代。ある社会のなかのある階層に属するあるイデオロギーをもった、一定の[?]セクシュアリティをもった)集団といった)特定の階層によって下位分類する認識方法(本誌29号p.6)には、あるいは「レッテル貼り」に善用されかねない危険を感じます。さらには(その集団、その權威、組織があるだけ)で問題は終わるのでしょうか。むしろ問題はそこから始まるはずで、(ジェンダー史観)もそのなかで、認識論的水準のみならず、いやおうなくある一定の政治的效果を発揮する装置であることは、頭ごなしに否定なさる方がかえって危険かと存じます。

[2-2] この点に関連しますので、第2点

の後半に移ります。若桑様によれば、千野氏は(a) (男性支配という歴史的事実を間違えたと言っているのでは)ない。彼女は(b) (一部男性の言説を普遍的だと思ってきたのは間違えた)と言っているのであって、ここで——当方の解説に誤りがなければ——稲賀は(b)を(a)と誤読する(奇妙)な(取り違え)をしているとのこと指摘です。まず(a)については、千野氏のこの場での発言の意図とは無関係に、小生は(a)のごとき平塚らいてう的(?)判断も(またその逆に)あくまで「正しかった」と言い募る暴論も——ともに小生個人の意見ではありませんが——(政治的)には権利上許容されてしかるべきだと考えます(それが「美術史学」さらには「ジェンダー史観」にとってふさわしい選択か否かの判断そのものを、当方は学術以前の「政治的」決定と定義しており、かかる決定は個人の責任に帰すると判断しますので、その是非にここで私個人の意見を差し込むことは遠慮します。ただ例えばゴーマニズムに対する若桑様の態度表明への賛同は上に表明したとおりです)。

当方の眼目は(a)のような「誤読」の可能性は論外として、もっぱら(b)として解釈した場合に千野発言に宿る曖昧さを指摘することでした。(前段落のご批判を受けて——不本意ながら一応——言い直しますが) (異性愛男性の価値観によって選ばれた)言説としての(美術史)およびかかる言説を(無批判に) (信じた自己)を(間違っていた)と自己(告白)する姿勢そのものに(政治的善悪と認識論的正誤)の混線が見られる、というのが当方の見解であり、若桑様のご批判とはすれ違っているかと存じます。何かを普遍的と思ってきた自分のまちがいに気づくのと、普遍的と信じてきた人々はまちがっていたと断罪すること、さらにその(まちがい)によって現に作られてしまった歴史像そのものを否定すること。この3つのうちのどの水準の発言か判別不能な点が危惧されたわけです。この当方の見解——あるいは(誤解)——になお修正を加える必要があれば、再度ご指摘戴ければ幸いです。

蛇足ながら、(一部男性の言説を普遍的

と想ってきた)認識の歴史の形成過程と、かかる信仰を支えてきた文化的背景の解明——というあたりこそ、当方が問題のシンポジウムに期待しながら十分には報われなかった、と感じた部分でした。さらに言えば今まで普遍と信じてきたものへの信仰の魔術から解放されれば——つまり「自分は間違っていた」と気づいて、その点を自己批判すれば——、それでよいとは参らない、という論点も、ご批判戴いた拙文では明記しておいたはずですが(前掲p.13)。

[2-3]これと関連して次に、若桑様は上の発言を千野氏の(言説を信じた自己)への、いわば私的な資格による反省的言及(つまり個人的な判断の修正)だったとする助け舟を出されて、そのお陰でなにが問題となっているかが明確になりました。と申しますのも、当方は件の宣言文を拝見して、(間違っていた)という発言の主語にある(私たち)はむしろ集団的共同体が共有すべき「普遍的」なメッセージを指向したもの(これは認識論上の、いわば無人称による正誤の認定に接近します)と「誤読」し、ここに違和感を抱いていたからです。(私たち)の仲間入りを許されるか否かの分かれ目が、この文章に首肯するか否か、となれば辻褄は合いますが、生憎、小生個人としてはそもそも(一部の異性愛男性の価値観によって選ばれたものにすぎなかった)(美術史)をもとより(普遍的)とも(主流)とも思えない、という(悲愴な?)体験から出発して美術史学批判を志した者でしたので、最初からこの(私たち)から疎外されていたのかもしれない。こういう存任は(理解)を絶しているのでしょうか。

なお、今回の若桑様の要約で千野論文の意図は十分に尽くされていて、当方としても(ジェンダー論を無効だ、などと宣言した記憶はない手前)その意図に反論はありません。したがって以下の弁解は無用なのですが、千野論文そのものの検討を差し控えたのは、それがあくまで別途公表された以上、当日のシンポジウムの「報告」に「流用」するのは憚られたからにすぎません。ただ、千野論文の(成果を可能にしたその方法論)が、当方の問題

にした宣言文であると若桑様は主張されますが、当方は、この宣言文が千野論文の実現とは、学問的な手続きの水準では無関係（ない）混線させて論じるにはあまりに危険な表現を含む」と判断したからこそ、敢えて美術史学以前の水準（つまり（研究方法の前提））に限定して問題にしたに過ぎません。そうした回避を非学問的と指弾されるのは心外ですので、敢えて一言することをお許しください。およそ社会における権力関係の分析を（ジェンダー史観）の専有物と化し、この（史観）に「敵対」すると判定したものを（叩）くというのは党派的なスタンスで、それを（美術史学のレヴェル）という言葉で正当化されるのは、「独善」かと存じます（「党派的」であることそのものを悪いと申しているではありません）。なお、これも蛇足ですが、そもそも（異性愛男性）などというカテゴリーがこの国（をはじめ至る所）でどの程度有効なのか疑問視するのは、（愛）という言葉そのものの社会的な範疇が歴史的にいかによれ動いたかの研究が盛んな現在、第3世界ジェンダー論や家族社会学、ゲイ・スタディーズにも深い見識をお持ちの研究者に対しては釈迦に説法の類いなのです、差し控えます。

この間、千野論文に関しては、より専門の方々、シンポジウムの席上をはじめ既に幾つか根底的な批判を展開しておられます（参照＝本誌29号《事務局ニュース》）。したがって当方には、その屋上屋を重ねる理由は、もはやなくなったものと判断します。まして、それらすべてを一緒にたにされて、（男性諸氏によるパッシング）の一環だなどと曲解され決めつけられては、当方、かえって美術史ご専門の方々にあらぬご迷惑をかける愚を犯すこともとなり兼ねません。むしろ当方としては、若桑様もご提言のとおり、当方のシンポジウム批評に対する、専門家の皆様からの（学問的）なご批判や誤謬訂正を頂戴できれば、と念じております。

無意味に長い再反論は、このあたりで打ち止めにいたします。以上、当方が繰り返しているのは、上記のようなごくごく一般的論理操作に過ぎず、もとより若桑様が断定して

下さった、（ジェンダー史観とは過去の男性支配を否定し、誤謬として告発する政治的イデオロギーだと確信して深読みをしてしまったのであろう）といった、過褒に等しい（深読み）には、ただ苦笑するのみです（しかし、そもそもジェンダー史観がここで若桑様自身呈示されたような（政治的イデオロギー）であってはならぬ理由があるのでしょうか）。とまれそうした（深読み）の水準に話を逆流させないために、あえて「今、日本の美術史学をふりかえる」への（無料）寄稿依頼に応えた者としては、その一文が（それほど巨大な字で印刷されたのには驚嘆しましたが）またぞろ（ジェンダー美術史への攻撃）とか（千野氏への酷評）とか（パッシング）といった読み替えに利用され、当方が解消しようとしている無意味な本質論的ジェンダー対立（以前の生物学的性差決定論）に、かえって格好の口実を提供するような「甘さ」を含んでいたことに、暗澹たらねばならぬのでしょうか。

ただ、今回のご批判で当方が危惧せざるを得なかったのは——それがここのまで、この徒労のような反論を執筆した理由ですが——。

（ジェンダー史観（だけ？）は（客観的な科学）であり（「善悪」「正誤」を問題とするものではない））といった、言わば素朴なジェンダー史学無謬論にも飛躍しかねない発言が、それこそジェンダー論を発展させるに至った背景にある最近30年間の哲学的な（あるいはオリエンタリズム批判やニュー・ヒストリーからカルチュラル・スタディーズ、サブカルタン批評に至る、若桑様ご自身最良の紹介者かつ熱心な推進者のお一人であるはずの領域での）議論をまったく等閑に付して、高らかに宣言されてしまっている点にあります。

（複数美術史）を標榜していたさる外国の大学の専攻課程で、その旧植民地がらみの限界を嫌というほど見せつけられた経験を出発点として、ボンビドー・センターでの「日本の前衛」展批判やオリエンタリズム絵画批判など、微力ながら視点の交錯と価値観のせめぎ合う現場に立って、「美術史」を形成する磁場の生態を分析してきた者としては*、あたかもすべての問題が（男性諸氏が家父長制的社会と文化のなかで無意識的、意識的に培っ

てきた男性専制政治へのやみがい権利意識、抑えがたい女性意識、主権を周縁の他者に脅かされるかもしれないという被害妄想、感覚にまでしみこんだ男性中心思想)に還元されることでもいった、それこそ(若桑様ご自身ご発言のとおり)(学問的ではない)議論を前にすると、せっかく貴重な時間を費やしての御反論なのに、なんだか10数年以上昔に連れ戻されてしまったような落胆は隠せません。

最後に、今回の若桑様の反論によって、若桑様と千野氏との微妙ながら決定的に異なる立場表明がなされているかに「邪推」されましたので、その点についてひとつだけ質問申し上げます。小生が千野氏の(主旨には基本的に賛同しつつも)論理の詰めの甘さに終始はらはらしながら読むほかなかった文章を——せめて外語で発表される時にはご注意ください——、それでも長々と引用した理由には、そこに(当方の言い直しをお許しいただければ)(既存のヒエラルキーを暴奪する権力闘争とは無縁な非権力による「学問の刷新」)という美しい夢が語られていたからです。悲観症の小生は、これは所詮夢として抱き続けるはかない無の場所「u-topia」と覚悟しています。それは「あいだ」のようなミニコミ誌でつかのま許される解放区でしかないのかもしれませんが、とはいえ、この千野氏の文章には、多くの論者が陥りがちな陥穽がひとつ、注意深く回避されているように思われました。

ところが、その援護射撃であったはずの若桑様の今回の文章には、まだこの手の敵(あるいは小生がその仮想敵と誤認していただく榮譽に浴したような手合い)を相手にせねばならぬような閉塞状況がなお続いているのか、と当方を落胆せしむるに足る、文脈のずれたご発言が多々目に停まりました。当方を(ジェンダーを敵視する学者)と推測しておいでの様子である以上、何を申しても議論にもなりません、(まず第一に相手の意図の

誤解から発して、第二に根深い反感から発した)(恐怖にも似たリアクション)なる表現は、そのままお返すしかないのが残念です。また(それが自分の現在の立場を侵食する可能性がある場合には敢て意識となって現れる)という被害者意識ばかりが先走ってか、当方の論点とは無関係な、批判をされた当方としては、この程度のことも認識していないのかと誤解されるのは心外にして片腹痛い、幾多の有り難い「ご教示」に関しては、あえて反論するのは控えますよう。

それで、先程の質問に戻ります。ご批評には(全世界的状況から日本の研究者がこれ以上立ち後れないため)とか、(国際的な水準における新しい歴史学の動向への認識の遅れ)といった相変わらずの輸入性善説(それが危険なのは、保守派に安易な居直りの口実を与えるからでしょう。なお当方は借り物だから悪い式の議論は嫌いで、貸し借りは大いに結構だが、しかしそれと品質の保証とは別であり、かつ品質にこだわるのは危険だ、との考えです)とか、(あなたがた(男性)にとってそう見えたものが、わたしたち(女性)にはこう見える)といった(専制的)な本質論的視覚性差別異論、(女性支配の歴史をも発見)すればそれで(客観的な科学)であるとする論理飛躍のある主張、といった言辭が散見されますが、当方が遺憾ながら問題にせざるを得ないのは、こうした「反ジェンダー論的価値観」といってよいでしょう。とりわけ(オルタナティヴを提案する)のが千野氏の主旨だのご発言がありますが、(オルタナティヴ)という(すでに歴史的に手垢がついた)発想に隠された、密かなる権力志向を断固否認する覚悟にこそ、(ヒエラルキーそのものを無効化)するという千野氏の宣言文の可能性の中心(あるいは辺境?)もあつたのではないのでしょうか(とはいえそれは論理的に言って決して(もうひとつの、新しい歴史学)などに収斂するはずはない、という保留つきです)。 (西暦1998年5月26日)

* 編集部からの要請で、関連する拙稿をいくつか列記する。

L'Impossible Avant-Garde au Japon', *Connaissance et réciproque*, CACCO Éditeur, Louvain-la-Neuve, 1988, pp.197-207.

L'Invisible Avant-Garde au Japon', *Essai-Voir*, N° 10, 1987/88, pp.35-54.

「19世紀フランス絵画とその外部」『芸術の近代』, 岩波書店, 1989, pp.121-160.

'Negative Capability of Tolérance', *The Conditions of Reciprocal Understanding*, University of Chicago, 1995, pp.304-336.

De l'Artisme à l'artiste au seuil de la modernité japonaise', *Sociologie de l'art*, N° 8, 1995, pp.47-61.

To be a Japanese Artist in the So-called post-Modern Era', *Third Text*, N° 33, 1995/96, pp.17-24.

『異文化への視線』, 佐々木英昭編, 名古屋大学出版会, 1996, pp.1-18, pp.259-278.

あいだ EXTRA 30

発行＝美術と美術館のあいだを考える会

1998年6月20日 1部100円



1898（明治21）年、キヨッソーネによって描かれた明治天皇の肖像画が写真館で写真にとられ、「複製影」として全国に配布されたことはよく知られているところ。これはその肖像画制作の参考とするため、キヨッソーネが天皇の正装を身に付け、みづからモデルとなった写真（『おもしろい外国人エドアルド・キヨッソーネ没後100年展』図録、大蔵省印刷局蔵、1997、より。複写許可済み）

モリムラさん、
たまには和風もおやりなすって！

Why don't you pose yourself into some
national figures of this country, Mr. Morimura?

Composed by Fukuzumi Haruo